ARTS IN CITY

“DIY”から“DWO”へ
―グローバル都市、ローカルコミュニティ、個人の声

From “DIY (Do it Yourself)”
to “DWO (Do it with others)”
― Global City / Local Community / Individual Voice

“DIY (Do it yourself)” 에서 “DWO (Do it with others)” 로
― 글로벌 도시, 지역 사회 그리고 개개인의 목소리

从“DIY（Do it Yourself）”到“DWO（Do it with others）”
― 世界级城市、地方社区、个人的声音

文：太田エマ
Text：Ema OTA

【写真①】Pilipinas Street Plan / 都市を描き直すべく活動するアーティストグループ。グラフィティによって、ギャラリーや美術館ではない“アートへのアクセス方法”を都市空間に創造する。
【写真②】チ・トゥ / マレーシアで活躍するアーティスト。ブキビンタンでは、頭の上に水平器を置いてバランスを取り続けるパフォーマンスを行った。
【写真③】[space/scape] / インドネシア・ジョグジャカルタの文化研究を行う KUNCI Cultural Studies Centerのプロジェクト。ケーススタディとして、ジョグジャカルタにある広場・アルンアルンを遊園地として再創造するリサーチを実施。
【写真④】アウン・コとヌゲ・レイ / アーティストと村民が協力してサイトスペシフィックなインスタレーションをつくりあげる。写真は村の近くにある河岸で風船の彫刻を制作している様子。

【Photo①】Pilipinas Street Plan / Re-writing the city with Pilipinas Street Plan, pointing towards a new authorship of our city spaces.
【Photo②】Chi Too / A performance by Chi Too in Bukit Bintang, KL, balancing for as long as possible with a spirit level on this head.
【Photo③】“space/scape” / Alun-alun Kidul ≒South Square Park (http://southsquarepark.kunci.or.id) Imagining Alun-alun as Amusement Park, Concept and image by: Agung Nugroho Widhi, 2009.
【Photo④】Aung Ko and Nge Lay / Artists and villagers working together to create site specific installations. Here Nge Lay creates inflatable sculptures along the river bank close to Thuye`dan Village.

DIYの発想を持つ次世代の波

中国、インド、インドネシアが経済大国として台頭した2000年代、アジア経済は世界から注目を集めた。それと同時に起こったアジアのアートマーケットブームでは、一部のアーティストが一夜にしてビッグアーティストに変貌する現象が起こり、ユエ・ミンジュン（中国）、スボード・グプタ（インド）、アグス・スワゲ（インドネシア）を筆頭に、さまざまなアーティストがアートシーンになだれ込むように登場した。しかし、このようなコマーシャルギャラリー主導による潮流の一方で、異なる方向性を指し示すアーティストたちも現れ、近年の経済混乱はその流れに拍車をかけた。「DIY（Do it Yourself）精神」（＝他の人に頼らず、自らの手でつくる）を持つ次世代のアーティストたちが、新しいムーブメントを生み出したのだ。それは、草の根的活動や自発性にもとづいた、自らが舵を取り牽引する動きである。彼らはグローバル化の利点と落とし穴、その両方を経験した世代であり、国際経済の流れに対しても冷静である。そのため、批判的な視点で現代における都市の現状や、ローカルコミュニティ、個人のあり方を議論しているのだ。

東南アジアで活動する次世代のアーティストたちは、独裁、内戦、大虐殺、革命、民主主義化などさまざまな政治情勢を経験し、その爪跡はさまざまな地域に残され、いまだ不安定な状況が続いている。彼らの多くはこうした状況に影響を受け、自身の政治的な立場を深く問いかけるとともに、作品の主題として社会政治的な問題を多く取り上げている。いくつもの民族が織りなす文化や言語など、豊かな多様性を持つアジア地域において彼らが生み出す「議論の場」こそが、互いの相違点を理解し、多様性を維持していくために必要な手法といえるのではないだろうか。そして、現状維持を良しとしないアーティストたちは、新たな可能性に向けてさらなる挑戦に立ち向かっている。

都市との関わり

今回の『3331 TRANS ARTS』で紹介する6名のアーティスト/グループは、社会に対して批評性を持つアート活動の重要性や、アーティストが果たし得る役割を立証しているといえよう。とくにインドのCAMP（P07参照）、韓国のListen to the City（P04参照）、台湾のOpen Contemporary Art Center（以下OCAC）（P05参照）の活動は、都市の極端な国際化や開発に言及し、そのような現状において個人が発言できる手段や場の創造を試みている。CAMPは都市のインフラを利用、または介入し、私たちと既存のシステムの関係性自体を問いかける。一時的にせよ“私たち”がインフラをコントロールする権限を持つことで、都市の交通システムやテクノロジーに対して人々がいかに受身であるかを明らかにし、都市やシステムに対して本来持つ可能性を喚起させ、気付かせる。

Listen to the Cityは、インフラの問題をテーマに、その必要性自体に異議を唱え、それらがもたらす弊害や危険性を指摘している。韓国四大河川事業が企業と政府による独占的な開発であり、市民の懸念を無視して進められてきたことをプロジェクトを通して明らかにするなど、市民が関与する機会を与えられていない無意味な都市開発の現状に注目し、インフラの用途や目的を市民が検討するツアーなどを行っている。

OCACは近年、進行中のプロジェクト『POST.O the reverse of TOPOS』を通し、私たちとグローバル化との関係性を探求している。そのアプローチは「グローバル」と「ローカル」を対極に位置づけるような単純なものではなく、「もはやTopos（場所性、土地性）とはアイデンティティの擁護や中央に対する“地方”を暗示するものではなく、状況に応じて新たな“現場”を生み出すための戦略」という主張にもとづく。ローカリティとグローバルの文脈が複雑に絡みあう現代において、双方を切り離して考えることは不可能であり、それらは同等に評価し、分析し、想像されるべきであると彼らは訴える。そして、さまざまな事象や問題が重なり形成される固有のアイデンティティを追求していく。

都市空間の脱構築や都市開発への挑戦は、アジア地域の多くの若手アーティストを駆り立て、さまざまな文脈において独自のムーブメントを生み出してきた。例えば、フィリピンの首都・マニラを拠点に活動するアーティスト、マーク・サルヴァトゥスはアーティストグループPilipinas Street Plan【写真①】において、「都市は自由な表現の場である」と宣言し、大々的なグラフィティ・ムーブメントを起こしている。政治的な利権により推進される都市再生に異論を唱え、私たちはどのように都市空間を構築し、利用するべきか？　彼らは、プロジェクト『Neo Urban Planner』を通して議論し、自由に発言する場を設け、都市空間を市民の手に取り戻そうと試みている。

また、マレーシアの首都・クアラルンプールを拠点とするアーティスト、チ・トゥ【写真②】は公共空間の欠如に対して意義を唱えている。利用が制限されているムルデカ・スクエア（独立広場）にアーティストを定期的に集め、伝統的なゲームで遊ぶなど、都市空間に対する創造的な介入を試みる。インドネシア・ジョグジャカルタの文化研究に特化した非営利機関KUNCI Cultural Studies Centerのプロジェクト『space/scape』【写真③】では、公共空間における社会文化的ダイナミズムを批評的に分析し、地域性、文化、経済、政治の流れを強調した。

コミュニティに向けられた新しい視点

都市のグローバル化をテーマとするアーティストが増加した一方で、多くのアーティストがローカルコミュニティに焦点を当てた活動を行っている。これは、既存のコミュニティとの協力や、新たなコミュニティを構築することで、私たちの身体性や共存により生きてきた人間本来の感覚を取り戻す動きといえる。

OCAC、そしてグエン・フォン・リン（P06参照）が活動する『ニャサン・スタジオ』は積極的にアートコミュニティを構築する。しかし、彼らの関心は塩づくりを営むベトナムの小さな村や、小民族が暮らす台湾の村など、ローカルコミュニティが持つ歴史やストーリー、そして彼らが現在直面する問題とアートがいかに関わっていくかにある。

アートがコミュニティに与える影響を証明するプロジェクトのひとつに、ミャンマーのアーティスト、アウン・コとパートナーのヌゲ・レイの活動【写真④】が挙げられる。コは「ミャンマーを変えたい」という強い意志を持ち、2007年以降、ミャンマーのビィ市の近くにある地元の村でユニークなアートプロジェクトを企画している。“アートは世界を異なる視点で捉える方法を提示し、コミュニティに変化をもたらすことができる”という信念を持つ彼らは、毎年ミャンマーのさまざまな地域からアーティストを地元の村に招聘している。訪れたアーティストたちは、政府からの干渉や検閲を気にする必要のない田舎の風景のなかで、村民と共同でサイトスペシフィックなインスタレーションやパフォーマンスを発表する。ギャラリーで行う展示ではなく、アーティストと村人が意義のある関係を築くことでこそ、アートはその力を発揮する。彼らの活動は、アートの教育的観点や価値を重視し、あらゆるアイデアや方法論を村民と共有する。そして、既存のシステムを変化させるため、村民自体が主体となった勇気ある行動や関わりを引き出していくのだ。

個々が発信する“問いかけの声”

2011年12月に発行されたアメリカの『Time』誌は、2011年を「プロテスター（抗議する人）の年」と象徴した。ここで紹介したアーティストたちは、以前から社会性の強いアートプロジェクトを行っており、その活動は既存のシステムに対するアンチテーゼだけでなく、個々が自由に表現し、発言できる場の重要性を強調するものである。そして、新たな対話を求め、個々の“声”を届ける手法を模索した結果、多くのアーティストが独自のメディアを立ち上げはじめた。韓国のListen to the Cityは、都市開発問題に対する意識を高めるための雑誌を自費出版し、インドのCAMPは個人やグループが独自に取材した社会、政治、文化に関する問題を自由に共有できるネット上のアーカイブ『Pad.ma』を運営している。こうしたインディペンデント・メディア運動は、とくにラオスのような報道規制の厳しい国において重要な役割を担っている。ラオスでは、アーティストだけでなく、ディング（Athidxay ‘Ding’ Bouandaoheuang）【写真⑤】をはじめとするクリエイターたちも、メディアの権限を国民に戻すための活動を牽引している。インディペンデント・メディア・ユニット『DOKLAO』のアソシエイトマネージャーであり映画監督であるディングは、カオスのさまざまな地域・地方で子どもたちに向けた活動を行っている。子どもたちにスキルやリソースを伝え、彼らがコミュニティの価値を再発見し、自分自身の声で地域やコミュニティで起こる出来事を発信できる「記者」として成長することを目指している。

こうしたアーティストやクリエイターたちの活動は、社会的・政治的意識が高く、共通のビジョンを持ち、異なる組織や団体とさまざまなかたちで協力して行われている。彼らのアートプロジェクトは、グローバルとローカルが混在する現代において、創造性を共有するリアルな現場や議論の場を構築し、コミュニティを繋げ、築き、私たちの存在について問いかける。そして、彼らの活動は「DIY＝自らの手でつくる」精神やロジックを核としながらも、「DWO（Do it with others）＝一緒につくる」理念へと進化したといえる。彼らは「都市」「コミュニティ」「個人」を都市の多様な側面から捉え、私たちを取り巻く社会を自らの手で再構築するための批評や分析を活発に行う。アートマーケットが静かな今こそ、彼らの問いかけが「声」となり社会に響きはじめるのではないだろうか。

The Next wave of a DIY Generation

In the 2000’s Asia witnessed an art market boom, just as world economic attention was turning to the superpowers of China and its competitor India, along with the rising strength of Indonesia, artists are fabled to have been turned into millionaires overnight. Those such as Yue Minjun, Subodh Gupta, Agus Suwage came to dominate the international art scene, bringing many followers in their wake. But behind this movement led by commercial art galleries there has been building a wave of a different directive, which, as markets are hit by economic turmoil, may be offered the chance to come to the fore. This is the wave of the next generation who have looked towards the alternative, who have built their activity from their own grass-roots initiatives, holding onto a fiercely autonomous, self-directed position which we can see exemplified by their DIY spirit. This is a generation of a little more wary of being taken by the flow of the global economy, having witnessed both the benefits and pitfalls of globalized development and now critically questioning the contemporary urban condition which has been given rise to, along with its impact upon local communities and the voice of the individual.

The next generation of South East Asia have already experienced much political upheaval, dictatorships, civil war, genocide, revolution, democratization, have all left their mark on the different regions, many of which still continue in various states of unrest today. This has also led some artists to intensely question their political stance and tackle particular socio-political issues within their work. Already in a region with such a mix of ethnicities, cultures and languages critical discussion is an essential tool in understanding difference and allowing the survival of such diversity. Artists can not accept the status quo but must push for new possibilities and lay out new challenges.

The City

The 6 artists/groups featured in this issue of 3331 Trans Arts testify to the necessity of a critical arts practice and have substantiated their own position within this. In particular in the work of CAMP, Listen to the City and Open Contemporary Art Center (OCAC) we find a critique of the urban condition in the age of global cities and intense urban development, while offering a means for the individual to express their own voice within this. CAMP utilizes the very infrastructure of the city, hacking it in various ways through which our own relationship with this system is called into question. Through a temporary empowerment we are led to rethink our passive position in the urban network and its technologies which surrounds us, realizing our ability to write the narratives of these structures.

Listen to the City also deals with issues of infrastructure but in this case challenges their very necessity, demonstrating their dysfunctionality and detrimental potentials, particularly in the case of the four rivers project where the power to implement infrastructure is shown to be firmly in the hands of corporates and the government, overriding the concerns of general citizens. While tours of the city draw attention to a nonsensical urban development in which again citizens are given little voice, while pointing towards alternative utilizations of such infrastructure.

OCAC have also in recent years come to explore our relationship with globalizing forces particularly in the ongoing project POST.O the reverse of TOPOS, but in this case does not position the global and the local as a dichotomy, claiming that “Topos no longer merely implies a desperate defense of identity or a position on the fringe”, but is now a strategy of “inventing locales as they are needed”. Here they critically negotiate the complex web which interlaces locality and its global context, aware that they can not be dissociated from each other and must be equally valued, critiqued and reimagined, seeking a local identity which is the product of these diverse influences, not separated from them.

It is this deconstruction of urban space and challenge to urban development which can be seen to harness the passions of many young artists across the region forming their own unique movements within their own contexts. For example in the work of Manila based Mark Salvatus and his joint initiative Pilipinas Street Plan [Photo①] urban space is reclaimed as a space for the freedom of expression in a hugely popular graffiti movement which also gives challenge to state sponsored urban regeneration based on political gain, instigating discussion as to how we formulate and inhabit such spaces through projects such as “Neo Urban Planner”. Alternatively Chi Too [Photo②] in Kuala Lumpur has initiated his own subtle stand to the lack of democratized public space in the city through simple regular gatherings utilizing the officially restricted area of the “Merdeka Square” as a space to play traditional games. While a more theoretically framed approach is offered by projects such as KUNCI Cultural Studies Center’s “space/scape” [Photo③] which critically explored the socio-cultural dynamics of public urban space (in this case the historical Alun Alun, Yogyakarta), highlighting local, cultural, economic and political flows.

The Community

And as an increasing group of artists grapple with the globality of their cities, many too are led to exert out the local community, perhaps in an attempt to recapture the sense of human scale and our interdependence, either collaborating with existing communities or building their own.

OCAC and Linh Phuong Nguyen, as a member of Nha San Studio, are highly active in fostering their own art communities but their interest also extends to the engagement of local village communities such as those of the salt industry in Vietnam or indigenous ethnic minorities in Taiwan, recording their stories, their history and as well as the current hardships they face.

Other such projects which reveal the power of art to transform communities may be seen in the work of Burmese artist Aung Ko, along with his partner Nge Lay [Photo④]. Since 2007 Aung Ko has been facilitating a unique art project in his rural home town village close to Pyay, Myanmar. With a passionate desire to change his country Aung Ko believes that art can present another way of thinking about the world around us and can inspire change not through its presentation in city art galleries but by building a meaningful relationship between artist and villager. Every year Aung Ko and Nge Lay invite a group of artists from around Myanmar to congregate in Thuye dan Village, to collaborate with the villagers and freely create site specific installations and performances in the rural landscape, away from government surveillance and censorship. With a strong focus upon the educational value of art the artists here subtly challenge the predominant system through the exchange of ideas and approaches which they hope will inspire a courage and commitment towards change from the bottom up.

The Voice

Such undertakings also demonstrate a certain activist spirit not only in their challenge to existing systems but in the emphasis they lay upon freedom of expression and the independent voice. All the artists here aim to open up new conversations in which it is vital each voice is heard, and amongst such strategies to encourage greater engagement we may also observe the increasing rise of the independent media movement, which many artists are also actively contributing to. Listen to the City, have established their own publication to raise awareness of the issues of redevelopment, while CAMP have led the way in creating an open source system for individuals and groups to upload their independent media reports on